



挑む ①

素早い突きや蹴りに、道着がバツと音を立てる。格闘技のデコンドールの中でも、対戦するキョルキ（組手）と異なり、演武の正確性や表現力を競う（型）に出場する。

「世界と関われる舞台に立たい。同じ競技者と出たい」と昨年6月、国内にデフリンピック選手がいない種目のトライアウトに参加し、代表に選ばれた。石岡市内の道場に連日通い、地元の小中学生らに交じって練習を続け、世界に初めて挑む。

指導する鈴木高広さん（55）は「一年半程度でよくここまで、まじめで根気がある。筋力も柔軟性も高まっている」と評価。指導に手話通訳はなく、口をはっきり動かして、近くで話す。同じ道場で中学1年の岩崎夢さん（12）は「大会では、キレがあつてカッコいい演武を決めた。金メダルを」と応援する。

3歳の頃、お遊戯や友だちと遊んでいて、一人だけ笑ってないことに親が気付いた。感音性難聴のため大きな音が分かる程度で、補聴器を

デコンドール

星野萌選手（21）

蹴りの練習をする星野選手。いすも市岡市で。



デフデコンドール 空手とキックボクシングを合わせたように対戦するキョルキ（組手）と、防御や攻撃の動作を組み合わせた演武のブムセ（型）がある。基本ルールは、聴者と同じで、合図はランブなどで伝える。韓国や東南アジア諸国が強豪。ブムセでは17種類の型のうち8種類を習得。うち直前に表示された2種類を、1種類90秒で演武する。技の形や立派などの正確性と、キレや速さ、力強さなどの表現力を採点する。会場は東京都中野区総合体育館。星野選手のブムセ個人女子は11月22日。

初の世界へ 踏み出す

大学に進み、競技再開

付けて生活する。

小学生の頃は土浦市内の水泳教室に通っていたが、こう者は自分だけ。水にぬれるのが補聴器を外す。コーチから泳ぐコツを教えられることも聞かず、分からない。友だちは上級クラスに行くのに、自分だけ取り残された。

5年生の時、同じ施設でのデコンドール教室の様子が、休憩室のガラス越しに見えた。床の振動、蹴った時の衝撃を感じた。当時好きだったアニメの格闘シーンのよう。「カッコいいなあ。これなら、みんなと一緒にできるんじゃないか」と教室に通うようになった。

中学まで聴者と競技を続け、高校は水戸聾学校（水戸市）へ。通うのが大変で寮に入った。道場が身近になく、陸上競技を始めた。デコンドールでは競技中、補聴器を外す。うまく話さず、聞いてばかりを感じたという理由もあった。

ろう者の通う筑波技術大学（つくば市）に入ると、音声器（アプリア）など意思疎通の方法を学べた。心残りのあったデコンドールを再開した。「高校では新型コロナウイルス禍で

ほしの・もえ 2004年、阿見町出身。身長150センチ。筑波技術大学産業技術学部総合デザイン学科4年。霞ヶ浦聾学校（阿見町）、水戸聾学校卒。小学1年で手話を習得した。好きな型は前蹴り。「手や足の先まで、しなやかに見えるから」。好きな食べ物は納豆やキムチなどの発酵食品。趣味は道の駅巡り、マラソン。

思い出さず、何もできなかった。大学では、何かに挑戦してみたい思いもあった。「小さい頃は、とにかく楽しんでいたが、競技者となると再び、コミュニケーションの壁に当たった。話す相手の言葉、気持ちが分からない。熱い思いにあれば、きつい口調の指導者もいた。『空気が読めない、何もわかっていない』と思われたのかな。今年1月には合宿の前日に発熱。でも、聴者と一緒の合宿で、自分のために手話通訳がつく。申し訳ないし、費用もかかる。無理に参加し、初日に倒れた。同じ競技者や大学の後輩が支えになっていた。昨年10月

に神奈川県内で開かれたろう者の大会で、他のブムセ選手に初めて会い、「自分もその世界に入りたいと実感できた」。優勝し「心の中で一歩前に踏み出せた感じ」を得た。中学の時、学校を訪問したデフリンピック選手はキラキラしていた。当時は何の夢もなく、なんとなく過ぎていた。選手の話聞き「大事なことは自分の意志なんだ」と思った。「私と同じように聞けない子どもたちに、夢を追いかけて物事に当たる大切さを、行動を通して伝えたい。メダルを取って、デコンドールのファンを増やしたい」